

第 39 回安田女子大学・安田女子短期大学エッセイコンクール

優良賞 課題部門：「自分らしさ」

現代ビジネス学科 1 年 1 組 周崎花歩

私たちは生きていく上で様々な選択をしてきました。その決断の中にはうまくいったことも後悔したこともあります。その時違う選択をしていたらどうなっていたのか考えたことはありますか？違う結果になっていたかもしれないし、もしかしたら奇跡的にもしくは必然的に同じ結果になっていたかもしれない。それは起こってみないと誰にもわからないものなのです。どちらか一方を選ぶ時、まるで綱引きのような葛藤が日々心の中で起こっています。間違った選択をした経験から、選択することに恐怖さえも感じる場合があります。しかし、大人になるにつれてこれからもっと多くの選択、自分で責任をもつ必要がある選択をすることになります。

どうすればうまく選択ができるようになるのでしょうか。「二律背反」という言葉があるように「節約はしたいけどこれが買いたい」や「眠いけどゲームがしたい」などどちらも捨てがたいことだけどどちらかを選択しなければならないという場面にすべての人が直面したことがあると思います。「二律背反」はどちらも譲れない、究極の選択といっても過言ではありません。そのため、多くの人が私のようにこの選択に悩まされてきたことでしょう。もしくは、「二律背反」だと気づかないうちにこの選択に悩まされていた人も多いのではないのでしょうか。私にもこの「二律背反」を実感し、強く印象に残っている体験があります。

それは、私が高校 3 年生の時大学に進学するか迷っていた時のことです。私は勉強が嫌いではなかったし、やりたいこともあったので大学に進学するつもりでいました。ですが、よく考えてみると、私の家には兄が 2 人いて 2 人とも私立大学に進学していました。そのため、私も私立大学に進学するとなると両親への負担も大きくなってくると思い、進学するかどうかを悩むようになりました。大学でもっと多くのことを学びたいという思いも家族に負担をかけたくないという思いも同じくらいにあったのです。

この「学びたいけど家族に負担をかけたくない」という二律背反の中で、私はしばらくの間立ち止まっていました。自分の未来のために大学に行くのが本当に正しいことなのか。四六時中考えていたそんな時、祖父が「迷うことは悪いことじゃないし、そんなにどちらも大切にしているのはむしろいいことだ。でも時間は戻ってこない。後悔したって一度した選択は変えられないんだ。だったらやらなかった後悔よりもやった後悔のほうがいい。それに無理に選ぼうとしなくてもどちらも実現できる方法を考えてみればいいじゃないか。それも一つの選択だよ。」と言ってくれました。その祖父の言葉を聞いて私の考え方は大きく変わりました。確かに大学に行くのはお金がかかるけど、その分アルバイトなども頑張って少しではあるかもしれないけど両親への負担を減らせるかもしれない、奨学金を借りて将来自分で働いて返すという選択肢もあるし、もしかしたら、今までは考えもしなかった他の方法があるのではないかと考えるようになりました。

私は家族や友達などたくさんの人に相談に乗ってもらい、様々な人の意見を聞き、結局大学に進学しました。しかし、後悔はしていません。自分でたくさん考えて選んだ道だからこそ頑張ろうと思えるし、少しつらいことがあってもきっと乗り越えることができると思います。これからは、大学で学んだことを生かして両親のお店に役立てたり、家でのお手伝いをするなど、最初は小さなことでもできることから実践し、いつか大きな恩返しができたらいいなと思います。そして、今好きなことができているという現状に両親や祖父母など多くの人に感謝しないといけないと改めて感じました。

この経験から、二律背反のような選択を迫られたとき、固定概念に囚われず視野を広げて考えてみることで新たな選択肢や考え方が見えてくるということが分かりました。私は今回、どちらにも実現するという道を選びましたが、実際その選択が正解だったのかは今でもわかりません。この先もこの選択が正解だったのか分かる日は来ないかもしれません。しかし、周りの人たちの力を借りながらも、自分自身で考えた末の決断だったということには変わらないのです。この決断が誰かに否定されたとしても、私自身が自分に正直になって決めたこと、つまり自分なりの答えなのだとしたらこれも自分らしさというものなのかもしれません。

これから先、私たちはもっと多くの「二律背反」に出会うでしょう。そのたびに、自分の気持ちや状況を整理し、時には周りの力も借りながら自分なりの答えを探していきます。答えが1つに定まらないからこそ、人は考え、失敗し成功するのです。これからも失敗を恐れず様々な選択をし、人生をより豊かで充実したものにしていきたいです。それに伴った失敗はきっといつかの自分にとってプラスになると信じています。